

『科学的ヒューマニズムを求めて』再読

最近、前に読んだ(ざっと目を通した)本を「再読」して、示唆を受けることが多い。表題と写真にある、1998年に新日本出版社から刊行された本もその一つだ。世界的な経済学者である都留重人先生のメッセージが伝わってくる。

都留先生は1929年に旧制第八高等学校(現在の名古屋市立大学滝子キャンパス)に入学したが、治安維持法という「天下の悪法」により検挙され、1931年に釈放されたときには「除名」処分になっていた。アメリカに留学することになり、そこで哲学者のオットー教授の「論理学」の講義をとる。教授から人びとの福利に奉仕するものとして科学の積極的な役割を重視する、本書タイトルにもある「科学的ヒューマニズム」に影響を受ける。



本書は「いま経済学の課題は何か」「社会保障をめぐる三つの問題—『シビル・ミニマム』、費用負担、世代間負担」「環境・公害問題にどう取り組むか—地球温暖化防止京都会議にあたって」の雑誌『経済』のインタビューを軸にしている。冒頭の「科学的ヒューマニズムを理想とする」は、先生の「自分史」となっており興味深い。そのなかに紹介されているのが、オーストラリアでの講演で使った、力兵衛・富蔵・仁吉という三人の兄弟についての日本の古い寓話である。

最初のうちは長兄の力兵衛が彼の腕力にもものを言わせて家族内の支配権を握っていた。「力は正義なり」が原則だったのだ。しかし、年が経つにつれて、力兵衛の腕力にも衰えがみられるようになり、おかげで以前のように彼は権力をふるえなくなった。そのころになると、次兄の富蔵は、大きな蔵をいくつか建ててくくらいに蓄財に成功し、今や彼が家族内で一番大きな発言力をもつようになっていた。つまり第一人者としての基準が「力」から「富」へ移行したのである。ところが或る日のこと、その村に火事が発生し、その火事で富蔵の所有していた蔵が全部焼けてしまい、一夜にして富蔵は無一文状態となった。しかも火事に続いて、村には疫病が発生したのである。ところが末弟の仁吉は、かねてから医術の勉強をしていたので、その疫病に対する専門的な処置を直ちにとることが出来、数多くの村民の命を救うことができた。こんにち、その村へ行くと、仁吉の銅像が村役場の前に建っているという。「仁」が「力」と「富」に勝ったのである。

こうして寓話をパソコンで打っていると、どこかで読んだような話であるが、日本の明治から現在に至る歴史を思い起こされる。都留重人先生は講演や本のなかで、よく寓話を活用される。三人の兄弟の寓話を使った講演は1964年のことだが、現在でも心に響いてくる。この本のなかで、社会保障や環境問題についても重要な指摘があるが、これについては別にレポートすることにしたい。

(2014年10月17日)